

## 陰陽師晴明の石仏

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

石仏の出土 1975年4月2日に、5体の石仏が見つかりました。烏丸通と上長者町通の交差点部分の烏丸通東側歩道沿いで出土したもので、この中に、「清明 ☆」の刻銘を持つ石仏があります。

当時の烏丸通は、前年から地下鉄烏丸線の建設にともなう発掘調査が始まり、工事関連の試掘調査なども路上のいたる所で日々行なわれていました。京都御苑沿いの地区では、石造物を数多く組み込んだ濠の石垣や石組の溝が見つかり、それが永禄12年(1569)に織田信長が最後の足利將軍のために建造した「武家御城(旧二条城)」のものである事が明らかとなりました。このニュースは、識者の注目を集めるとともに、新聞紙上などにもぎわせていました。

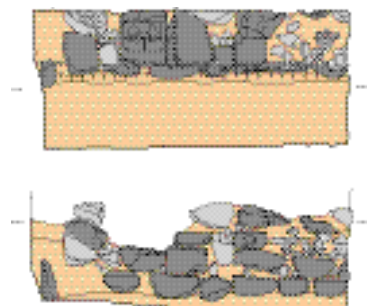
「清明 ☆」の刻銘の石仏は、工事関連の試掘で発見されたもので、出土時の記録は「日誌」として残されています。これらの石造物は隣接地での確認調査によって、溝の石組に石材として転用されていたことがわかっています。

この石組の溝は、中立売御門から上長者町交差点に至る約100mにわたって確認しています。信長は、旧二条城の築造と同時に御所の修築も行なっており、烏丸通の側溝も石組の溝として構築したのでしょう。



「清明 ☆」を刻銘した石仏

石仏の像形 阿弥陀如来の立像で、光背は壺形に造っています。鎌倉時代に造立されたものでしょう。残高は65cm・幅47cm・厚さ25cmで、上端と下半が欠損しています。石組に積むために、長さを合わせて半截したのでしょう。像長は56cmが残り、光背面から14cm



石造物を積んだ溝(1:70 ■ 石造物)

余り浮き出しています。印は、右手を胸前に上げて親指と中指を接し、左手は足側に下げて、ちゅうぼんげ中品下生の来迎印を結んでいます。

左耳脇の光背には、円文の内に観音菩薩の種子の「サ𑖀」を線刻しています。右耳脇は剥離していますが、円文の一部が認められますが、円文の一部が認められ、勢至菩薩の種子の「サク𑖀」が刻まれました。全体として阿弥陀三尊仏の像形となります。これは、来迎印を結んだ阿弥陀如来が菩薩を従え、死者を迎えて往生極楽に導く来迎図の形を一体の石仏であらわしたものです。

旧二条城関係の出土石仏は217体ありますが、立像は3体と少なく、来迎印を結ぶものはこの石仏1体しかありません。

「清明」と「晴明」 左手脇に刻まれている「清明☆」の銘は、およそ阿弥陀如来像と関連するものではなく、造像後の追刻です。ただ、周囲の彫塑と違和感のない風化の状態ですから、造立後比較的早い時期に追刻されたのでしょう。

「☆」は五芒星と呼ばれ、安倍晴明がよく用いていた呪符で、五芒星は、晴明桔梗印ともセーマンとも云われています。しかし銘は「清明」であって「晴明」ではありません。報告書では単純な誤記であろうかと考え、「清明☆の銘を追刻する」と記載しました。

しかし近年、安倍晴明や陰陽道関係の書籍が数多く刊行されて目にする機会も増えてきました。そのなかに、晴明が清明になる物語がありました。延宝年間（1673～81）に刊行された浄瑠璃本の『しのだづまつりぎつね並二あべノ清明出生』がそれで、外題にも「清明」とあるように、狐を母にもつ安倍童子・晴明が京に上って天皇を助け、当日が3月の清明の節会にあたることから「晴」の字を改めて「清明」の名を賜っています。

陰陽道で著名な書物に、『三國三國そうでんおんみょうかんかつ相伝ほ陰陽管轄きないでんきんうぎよくと簠籩内伝金烏玉兔集』という占術書があります。鎌倉時代末期に著わされたものですが、この書の写本や刊本あるいは、

内容に対する注釈書や由来書などの後世の伝本が数多く残されています。これらのなかに『安倍晴明物語』や『しのだづま』など文学や芸能の世界で描かれる「清明」の原型があるとされています。

刻銘の「清明」は誤記ではなく、正しく晴明を示す最も古い文字資料になるのかもしれませんが、しかも、石仏に刻まれていることから、「清明」は拝み・祈る宗教的な信仰の対象であることがわかります。この石仏は永禄12年には烏丸通の側溝に組み込まれているのですから、銘文はそれ以前に刻まれています。信仰対象としての「清明」は遅くとも室町時代のうちに成立していることは明らかで、このように、石仏に刻銘されるほどに一般性を帯びていたことが考えられます。

実在の陰陽師晴明への崇拜から、信仰の対象となり、その過程で「晴明」から「清明」となり後世に伝承されていったのでしょう。

（原山 充志）



出土した石仏群



刻銘